○佐藤 早織 氏（平成 12 年、息子（当時８歳）を交通事故で失う）

［要旨］

事故の概要と当時の状況

平成 12 年７月７日、交差点の横断歩道を青信号に従い横断中だった当時８歳の息子は、信号無視で進入してきた大型特殊クレーン車に轢き殺されました。この日の午後は授業参観日で、「必ずお母さんが行くからね」と言い、見送りました。しかし数分して息子は戻ってきて、何かためらっていましたが、すぐに「行ってきます」と登校して行きました。これが息子の最後の言葉となりました。そしてこの日を境に、私は「遺族」と呼ばれるようになりました。

息子は、自分の背丈以上もあるタイヤで頭部から体を全て踏みつぶされてしまいました。私が事故現場に駆けつけた時、まさか息子が既に亡くなっているとは思いもしませんでした。即死だったことを聞かされ、妊娠初期だった私は錯乱しました。見ないほうがいい、見せないほうがいいという周りの言葉の意味も分からず、息子を探していました。

棺が自宅に戻り、本当に息子なのか確認しようとしたところ、全身包帯で巻かれており確認もできず、抱くことも触れることも許されない状態でした。触れることができたのは、息子が最後まで身につけていたランドセルと衣類でした。ランドセルは、ベルトが引きちぎられペシャンコに潰れていました。中に入っていた筆箱も鉛筆も全て潰されていました。衣類はボロボロに裂け、血まみれで皮膚がたくさんついていました。遺影の写真選びからさまざまな方への連絡、火葬するには死体検案書が必要だということで取りに行く・・・つらい作業が続きました。

遺された子どもたち ～長女の様子

事故当時、長女は小学校６年生でした。現在 30 歳です。長女は、自分の弟とは知らず、「３年生の男の子が轢かれて死んでしまった」という会話を聞きながら、事故直後の横断歩道を渡っています。前を歩いていた子が「気持ち悪い」と言った息子の体の一部も長女は見てしまっています。学校に着いてから、先生に弟の事故のことを知らされ、自宅へ戻ってから「あれは翔樹だったんだ。なんで、翔樹なの」と私に訴えました。長女が、自分の弟が５分前に渡り轢かれて死んでしまった横断歩道を渡りながら目にしたもの、その時の人々の会話のことを聞いて、私は言葉にならない憤りを感じました。

ところが、私は事故のショックで流産しかかり、娘のそばにいてあげることができませんでした。私自身、呼吸をすることさえ精一杯だったのです。父親とは手が触れても嫌がった長女が、事故後は抱っこをせがみ、手をつながなければ外に出られない状況になりました。

テレビ局、宗教関係、高額商品のセールスなどが次々と自宅に押し寄せ、私たちは引っ越しを繰り返しました。私の入院中は、実母が長女を見ていてくれたのですが、母は長女が自宅に友達

を連れてくるのを禁止しました。「一周忌も経っていないのに自分だけ楽しいことをしてはダメ。翔樹はもう遊べないのだから、そのくらい我慢できるでしょう」と言われていたと、後になって知りました。友達の家へ遊びに行けば、根掘り葉掘り聞かれる。「きょうだい何人？」と学校の友達から聞かれれば、自分の弟の存在を消す。そんな自分が嫌になる、自分が死ねばよかったんだと私に訴えてきたこともありました。学校の帰りが遅くなれば、心配で何回も学校に電話をしたこともあります。長女は、先生から、「そんなに心配なら毎日学校へ迎えにくればいいのにね。交通事故は運が悪い人だけがなるんだから」と言われたそうです。

娘は事故後、全く集中力がなくなり、無気力で、精神年齢も小学校６年生で止まったような状態でした。「どうせ、いつ殺されるか分からない」それが口癖でした。長女は今でも、弟の仏壇に手を合わせることがなかなかできずにいます。その心の奥底にあるものを聞くのが私は怖く、今でも触れずにいます。

遺された子どもたち ～事故後に生まれた次女、三女の様子

当時お腹にいて、無事に生まれた次女は現在高校３年生です。幼い頃から、おやつやご飯を「翔樹の分」と言って分けてくれました。私が我慢できずに泣いていると、「翔樹はここにいるよ」と仏壇の前に手を引いて連れて行ってくれたことも何度かあります。また、頻繁に翔樹が映っているビデオを見たがり、「ここに行きたい、翔樹と遊びたい」と言うので、「今度一緒に行こうね」と二人で泣いたこともあります。

次女は９歳の誕生日を前に、「私は９歳を越えることができるのかな」と言ったことがあります。現在、事故現場近くの高校へ毎日通っています。今年の命日の後、事故現場の花を片付けに行く時になり、私がふと「事故現場に行くの嫌だな」と漏らしてしまった時、「私が行ってくるから、お母さんは車の中で待っていていいよ」と言ってくれ、私は涙がこぼれてしまいました。私がしっかりしなくてはならないと思いました。

事故から２年後に三女が生まれ、現在高校１年生です。この子は、亡くなった息子に声やしぐさ、顔も似ています。幼稚園の時、「事故がなかったら、自分は生まれて来なかったんでしょ」と私に訴えてきたことがあります。周りの誰かに、「あなたは翔樹君の生まれ変わりだよ」と言われたのだそうです。この頃、三女は情緒不安定になり、突然泣いたり、体を掻きむしり血だらけになったことがありました。その時、どうしていいのか分からず、教えてもらったのが子ども総合センターでした。

心の病の原因は私にあったようで、私の情緒不安定が三女に連鎖をしたというのです。私は、

事故から何年経っても、自分のことや亡くなった息子のことばかりで、しっかりと娘たちに向き合ってあげることができていませんでした。私は、事故後に生まれてきた子どもたちには影響はない、と勝手に思っていたのです。

私も子どもたちも家族みんなが、何年経っても元の生活には戻れないのです。今振り返って思うのは、そんな時だからこそ、子どもたちの話を聞いてやり、支えてあげなければならなかったということです。裁判も始まり、精神的な余裕もなくなり、母親である私には話を聞いてあげることすら全くできませんでした。放置と言っても過言ではありません。見たこともない母親の姿、朝から晩まで泣いている母親の姿、そんな姿を見て育ってきた娘たちは、きっと孤独を感じ、とてつもない不安に襲われたことと思います。

次女、三女は事故後に生まれましたが、それでもたくさんの影響を受け、兄に永遠に会えない悲しみを抱えながら生きています。

学校、地域、支援機関が連携し、少しでも早く適切な支援を

子どもたちは、どんなにつらくても、学校へ通わなくてはなりません。私は小学校、中学校とさまざまな先生に出会いました。家庭訪問で仏壇を目にした女性の先生方は、「お聞きしてもよろしいでしょうか」と私に真っ直ぐに向き合って話を聞いてくれます。しかし男性の先生方は、なぜか落ち着きが無くなり、問われることもなく、ほとんど話をせずに帰られた方もいます。

次女が５年生の時、命日で欠席した際、担任の先生がクラスメイトに事情を説明してくれたらしいのですが、その後、なぜか娘の机の上に菊の花を飾りクラスメイトに手を合わせさせたということもありました。後日友達から話を聞いた次女は、「こんな先生がいては、遺族はいつまでたっても救われないよね」と私に言ってくれました。

子どもたちの年齢に合わせた支援、それと、小学校・中学校・高校と申し送りがされ、地域や支援機関の間での細かな連携が必要だと思います。長期間での見守り、支援が重要だと思います。元気そうにしているからといって立ち直ったわけではありません。成長したから、理解できる年齢になったから、ということはありません。また、同じ境遇の子どもたちに出会える場所も必要です。ただ、そういう場所が苦手な子どももいます。さまざまな子どもたちに合わせたサポートを、子どもたちに身近な学校、先生にしていただけたらと思います。

事故後は、自分たち家族だけが別世界にいるような感じです。それは何の前触れもなく、突然投げ込まれたような世界です。窓を開けても、外に出ても、風景はいつもと変わらないのに、私たち遺族にはその当たり前だった風景も歪んで見えます。それは孤独な世界にしか見えません。

どうして私たちだけが、どうしてうちの子どもが、とそれぞれが自分自身を責めながら生きています。私がせめて落ち着くまで、私の代わりに娘たちの話を聞き相手をしてくれる気配りや思いやりを持って接してくれる方が、あの時にいてくれたならと今でも思います。

事故の日から関わってくれた警察官、検察庁の方々、弁護士も含め、全て男性でした。私が女性の警察官と話ができたのは、裁判も終わり、自分自身で乗り越え落ち着いた頃です。もっと早く出会えていたら、思いのたけを話できる方がそばにいてくれたなら、私は自分の体を傷付けることも、自分の命を粗末にすることもなかったと思います。

支援は、なるべく少しでも早く受けられるほうが、遺族は救われます。子どもの支援はもちろんですが、まずは親が精神的に救われることができれば、子どもたちにつらい悲しい思いをさせることも減るのではないでしょうか。